

Sān yuè bù zhī ròu wèi  
三月不知肉味sān gè yuè  
三月肉の味を知らず〈述而第七〉

桜美林大学名誉教授 植田 渥雄



BC517年、魯の国で内乱が起こり、時の君主昭公が隣国の齊に亡命するという事件がありました。その翌年、孔子も乱を避けて齊に赴きました。孔子36歳の時です。そこで齊国の楽師から、これまで耳にしたことのないような、素晴らしい音楽の演奏を聴かされました。それは太古の聖天子舜が作ったと伝えられる『韶』という名の音楽でした。その時受けた衝撃が『論語』に記されています。

「子在齊，聞《韶》三月，不知肉味。曰：『不圖。為樂之至於斯也！』(Zǐ zài qí, wén 《Shāo》 sān yuè, bù zhī ròu wèi。Yuē: 『bù tú。Wéi yuè zhī zhī yú sī yě!』)」(子、齊に在りて、『韶』を聞くこと三月、肉の味を知らず。曰く「図らざりき。樂を為すことの斯に至らんとは」と)。孔子は齊の国に滞在中、三ヶ月間『韶』の音楽を聴き続けました。その間、あまりに熱中していたため、肉の味さえ感じなかった。そして言いました。音楽というものがここまで素晴らしいものであったとは思ひもよらぬことであった、と。

三ヶ月間肉の味さえ感じなかったとは、ずいぶん熱中したものです。別の所では次のようにも言っています。「子謂《韶》：尽美矣。又尽善也。(Zǐ wèi 《shāo》: 「Jìn měi yī! Yòu jìn shàn yě!」)(子、『韶』を謂う「美を尽くせり。又た善を尽くせり」と)〈八佾第三〉。

『韶』が素晴らしい音楽であったことは、孔子はすでに文献や口伝を通じて知っていたようです。密かに憧れていたのかもしれませんが。しかしその音楽は、孔子の生まれ育った魯の国には伝わっていませんでした。だから実際に聴いたことがなかったのです。その名曲を思いもかけず齊の地で耳にすることができたのです。しかもそれは予想をはるかに超える素晴らしいものでした。残念なが

ら、孔子をここまで熱中させたこの音楽を今の私たちは実際に耳にすることはできません。この一文を通して、その素晴らしさと、孔子の熱中ぶりを想像するだけです。

さて、この一文ですが、句点の打ち方によって微妙に解釈に違いが出てきます。以上の解釈は、『史記』の孔子世家をもとにして、宋代、朱子学の始祖、朱熹が解釈したものです。孔子は齊に滞在中、三ヶ月間この音楽を聴き続けた。その間、肉の味も忘れて熱中した、つまり寝食を忘れて、この曲の習得に没頭した、ということになります。『史記』の文では「三月」の後に「学之」(これを学ぶ)の二字が入っています。このように解釈することによって、聖なるものに対する孔子の志向とその愛着ぶりを強調したかったものと思われる。この解釈は、孔子の日ごろの言動とも合致するので、誰もが納得しそうな解釈です。

一方、これとは異なった解釈もあります。それは句点を「三月」の前に持ってくる読み方です。これだと「子在齊聞《韶》，三月不知肉味」(子、齊に在りて『韶』を聞く、三月肉の味を知らず)となり、齊の地で『韶』の音楽を一度耳にただけで、感動のあまりその余韻に浸りきって、三ヶ月間、肉の味すら感じなかった、ということになります。こちらの方は孔子の音楽に対する天才的な感性と親和性を強調したものとと言えます。

このほかにも様々な解釈がありますがここでは省略します。前者は今日ではほぼ定説になっているようですが、一方、歴史学者の貝塚茂樹先生は後者に近い解釈をなさっています。この解釈にもなかなか捨てがたいものがあるように思えますが、如何でしょうか。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)